東南アジア研究　30巻3号　1992年12月

現地通信

スキポール空港の“スラマットソレ”

土　屋　健　治*

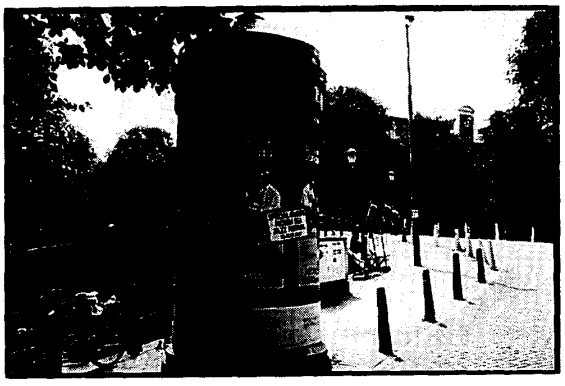
オランダ・スキポール空港では，パスポートも見ずに次々と乗客を入国させていた。カスタムもそのまま通り過ぎる。若い係官がうしろから“スラマットソレ”（こんばんわ）とインドネシア語で声を掛けたので，ふり返って会釈を返すとニコリとした（1992年6月23日）。

翌日，先発隊に合流してハーグへ出かけた。文部省科学研究費を得て，「海域世界の地域間比較」をテーマに北欧・東欧の交易都市を一巡する，その調査旅行の始まりである。

オランダでは街の風景の中にインドネシアが溶けこんでいた。

ハーグ郊外の大きな広場では，折りしも大天幕が張られサーカスやロックバンドや移動遊園などのイベントが始まろうとしていた。このオランダ風縁日は，“パッサルマラム”（夜市）と大看板を掲げて客寄せをしていた。

別の日アムステルダムのあちこちに，“ジャワ少年”という商標の刻みタバコの広告が貼られているのを目にした（写真参照）。この広告は昨年もアムステルダムで目にした。この年にはまた国立博物館の特別展示室で「ダエンデルス（1762～1818）展」が開催されていた。彼は親ナポレオンの軍人で，1808年から1811年まで東インド総督の任にあり，ジャワ島の東西を結ぶ「郵便道路」を造り上げた。ジャワの詳細な地図や歴史図解を，家族連れの人々が熱心に見学していた。



何げないことだが道路名もしばしば植民地に由来している。昔住んでいたライデン市の一角には，スマトラ，ジャワ，バリ，ロンボク，スンバ，アチェ等と名付けた道路が集まっている。これについて，植民地主義が清算されていないことを示すのだから止めるべきだ，という話もたえて聞かない。

インドネシア風レストラン，サテやナシ・ゴレンのような料理もヨーロッパの中でオランダだけのものだ。店構えなど1920年代のバタビアを思わせ，今しもランプが灯りホトホトと舗道をたたいて馬車が止まる趣がある。

オランダを他のヨーロッパ諸国からくっきりとわけているこの心性，つまりインドネシアに対する一途なノスタルジアは何に由来するのだろうか。

ひとつには，小国の身ながらアジアに大植民地を築き350年にわたって「守り育て」てきたと思いなすことによる世々代々のきずなの感情，“Primordial Attachment（生得の結び付き）”ともいうべき心性があるだろう。

だがもう一つある。それは，オランダがインドネシアを通してアジア世界の全てを眺めてきたこと，だからインドネシアがアジア的普遍性の窓口をなしてきたことによるだろう。

空港の若い係官は“スラマットソレ”が，アジアの共通言語だと考えていたのかも知れない。

（京都大学東南アジア研究センター教授）

* Kenji Tsuchiya, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University